陳舜臣さんと
神戸を歩こう

Ｐａｒｔ　４

陳舜臣さんを語る会

16「内海岸通（のちの乙仲通）」及び「旧居留地十五番館」

内海岸通（のちの乙仲通）

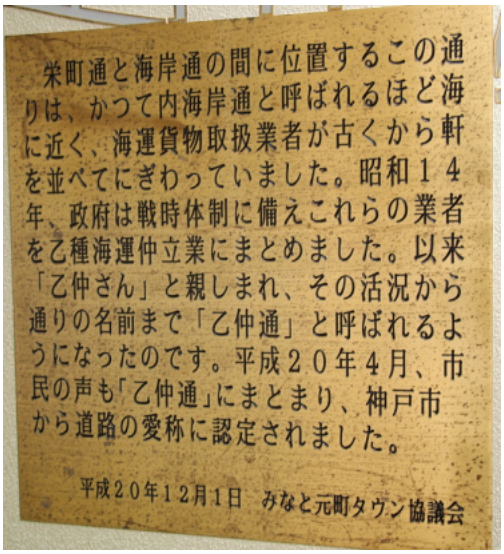
まず、『残糸の曲 上』（朝日文芸文庫）カバー裏のキャッチコピーです。

第二次大戦前の神戸。華僑商館の跡取りとして迎えられた修平。実の父親は中国人という真相に驚く間もなく、未知の生活はスタートした。自分は日本人なのか、中国人なのか？ 自らの根を探しに、中国大陸へ旅立った彼がみたものは…。一人の少年の成長と激動の世界を描く長編小説。

続いて本文を引用します。

栄町と海岸通の境界は、内海岸と呼ばれる通りであった。海岸本通ほどひろくはないが、この通りの両がわには、海産物問屋が五、六十軒ずらりとならんでいる。彼らは北は北海道から南は九州まで、全国各地の海産物を集荷してくる。それを華僑商館の人たちが仕入れて、中国や東南アジア各地へ積み出すわけである。（p.74）

このほか、随筆『道半ば』などにも「内海岸通」が出てきます。内海岸通が乙仲通と呼ばれるようになったのはもっと後のことです。詳しくは右の説明板をご覧下さい。



右の標識は、乙仲通の東端、鯉川筋（メリケンロード）を隔てて兵庫県農業会館が見えるあたりです。

旧居留地十五番館

陳舜臣さんは、『神戸ものがたり』（二〇一七 のじぎく文庫版）〝南北の道〟で、次のように記述しています。

慶応三年十二月に設けられた約四万坪の居留地は、明治三十二年七月に回収された。居留地時代の建物は、その後改築されたり、戦災で焼けたりして、現存するものは僅か一棟にすぎない。いまの株式会社野沢がそれである。十五番館と呼ばれていた煉瓦造り二階建てのこの商館は、明治六年ごろに建てられた。

少年時代、筆者は海岸通り五丁目に住んでいた。よく自転車にのって、海岸通りから元居留地へ行ったものである。そのころは車もすくなく、自転車のりは快適な運動であった。

筆者がよく行ったころは、居留地が廃止されてすでに四十年近くたっているので、妙な言い方だが、「日本化」されていた。

それでも、ふるい建物はやはり居留地時代の名残りをとどめて、ほかの地域にない特有の雰囲気をつくっていた。遠い国々とつながっているような気がして、筆者はなんとなくその雰囲気に浸るのが好きだった。（p.66-67）

また、『白い泥』で陳さんは、ジャクソン商会を、文中、次のように描写しています。左の画像は、今に残る十五番館ですが、雰囲気は感じられるのでは。

ジャクソン商会は、元居留地の一等地に小さいながらも二階建てという、いまにすればぜいたくな建物である。以前、近辺にはおなじような商館の建物がならんでいたが、いまではほとんど高層ビルの街と化し、むかしの面影をとどめているのは、ジャクソン商会だけとなった。頑固な面魂で、谷間にふんぞりかえっているといった恰好である。（徳間文庫版 p.92）

17 小学生の陳舜臣さんを診察した佐野実病院長

自転車でも買ってあげたらどうですか。（佐野病院長）

『道半ば』から抜粋・引用します。

北長狭にいたのは三年ほどであったと思う。小学校（※神戸校）の二年から四年にかけての時代である。

北長狭の借家は鯉川筋の裏にあたる。表通りには佐野病院があり、私は父に連れられてよく病院通いをした。とくにどこが悪いというのではないが、子供らしい活発さがないことを父は心配したようだ。

――自転車でも買ってあげたらどうですか。

これが佐野先生の診断であった。

おかげで子供用の自転車を買ってもらい、ほうぼうへ遠出した。元気なすがたをみせるのが親孝行だと思って、だいぶ無理をしたのである。

北長狭にいたころは、無理をしても元気に遊ぶふりをしなければならなかった。佐野病院の院長の子供たちとはよく遊んだ。（p.33-34）

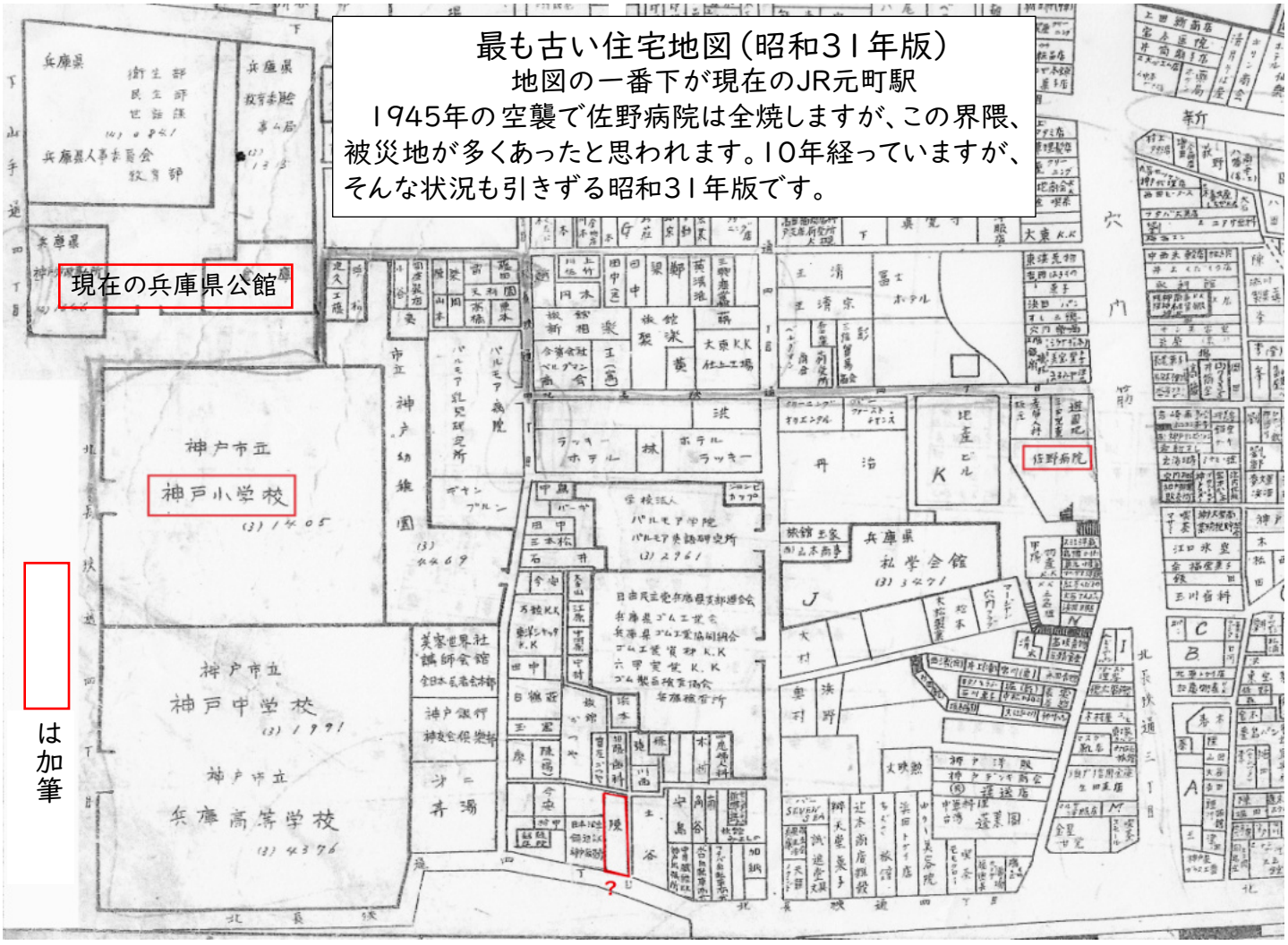
※は加筆）

左は、「佐野病院125周年記念号」（二〇一三年四月号）掲載、当時の病院と佐野実二代病院長の写真です。

1935年の佐野病院(現在の神戸市中央区鯉川筋)

佐野実二代病院長
(任:1924-70)

右にあげた「佐野病院125周年記念号」によると、一九四五年、二代病院長の時代、空襲で病院は全焼します。そんななかでの再出発でした。



最も古い住宅地図（昭和31年版）
地図の一番下が現在のJR元町駅
1945年の空襲で佐野病院は全焼しますが、この界隈、被災地が多くあったと思われます。10年経っていますが、そんな状況も引きずる昭和31年版です。

18 神戸市立第一神港商業学校、及び横溝正史生誕地碑

昭和十一年から五年間通った
神戸市立第一神港商業学校

ここに、陳作品のなかから、昭和十三年の神戸大水害の記述箇所を抜き出したのは、当時、陳舜臣さんが通っていた学校について知ってもらいたいからです。

まず、『道半ば』から引用します。

昭和十一年に第一神港（※神戸市立第一神港商業学校）に入学し、十二年には盧溝橋事変が勃発した。そして十三年には神戸に大水害がおこった。（p.48 ※は加筆）

次は、『青雲の軸』（集英社文庫）から抜粋・引用します。傍線は加筆。

昭和十三年は、七月にはいってから、連日雨が降りつづいた。三日、四日は一日じゅう降りっ放しで、五日の朝はまるで総決算のように、やけに降りつのった。

雨天は雲が太陽を遮るので暗いのである。だが七月五日の朝の暗さは、すきまのない雨のためにその曇った空さえ見えにくくなったためである。会下山台（えげやま）の学校では、折しも学期末考査の最中であった。

英語の試験であったが、給仕が紙片を持って教室にはいり、監督の先生に手渡した。

――即時、試験を中止し、雨天体操場に集合せよ！

監督の教師がその指示を読み終わると、全クラスの生徒が歓声をあげた。

「うわーい、ええセエや！」

雨天体操場へ行っても、集まった全校生徒がはしゃいでいた。教頭が壇上にあがって、「なにを騒いどるか！」と、どなった。

「おまえたちは、街がどうなっているか知っとるのか？」

「神戸ぜんたいが山津波にやられているのだ」

教頭は帰途を遮断された地域を説明し、そこから通っている生徒は残留せよと命じた。海岸通のほうは状況不明だが、あるいは行き着けるかもしれない。そんな心細いことであった。

俊仁は行くことにした。

学校のすぐ下の市電上沢通は、すでに濁流逆巻いて、通行不能となっていた。そこで、会下山の裾をぐるりとまわり、湊川公園の北、平野近くから迂回して、やっと市電の山手線に出た。（p.100-103）

左の写真、坂の左手に少し見えるのが、二〇一六年に開校した神戸市立神港橘高等学校の新しい校舎です。

地番は、神戸市兵庫区会下山町3-16-1で、アクセスは、神戸市営地下鉄上沢駅より徒歩5分、神戸高速鉄道大開駅より徒歩10分、JR兵庫駅より徒歩20分です。

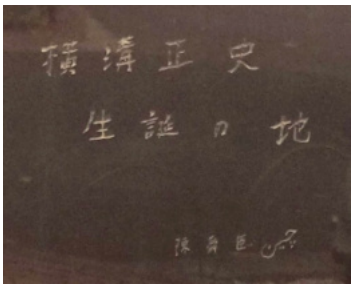
陳さんが5年間通った会下山台の坂。当時の校門は坂の上の方だった

「横溝正史生誕の地」碑
(東川崎町 揮毫:陳舜臣)

碑はＪＲ神戸駅を南へ出て南下、神戸新聞社前の道路を右手に進み６、７分、湊小学校前交差点を過ぎた辺りの道路脇の狭い土地に立っている。

立方体の台の上は、二つのつながったメビウスの輪で、複雑に絡み合った難事件が、名探偵により、見事に解決されていく〝横溝文学〟を象徴しているという。

除幕式は2004年というから、陳さんは、不自由な手でお書きになったのだけれど、なかなか味のあるいい字です。



19 陳さん屈辱の出来事 植木市と指紋押捺

小学生のころ、祖父と行った植木市でのできごと

『青雲の軸』（集英社文庫）から抜粋・引用。傍線は加筆。

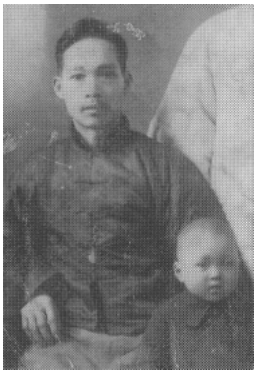
神戸の元町四丁目の通りの山側、五丁目に近いところに、むかしちょっとした空地があった。俊仁がまだ小学生のころは、定期的にそこで植木市がひらかれていたようだ。俊仁の祖父は植木いじりが好きであった。祖父は俊仁を連れて、その植木市の前を通りかかり、ついでのことに、のぞいてみる気になった。

そのときの祖父のいでたちは裏に狐の毛がついている、ゆったりとした中国服であった。ずいぶん高価なものらしいが、気に入りの服とみえて俊仁の記憶にある祖父は、いつもそれを着ていた。

ところが、むこうにいた植木屋が、大きな声でどなりつけたのである。

「こらあ！　ここはチャンコロの来るとこやないぞ。なんぼカネ出したかて、わいら、チャンコロには売らへんのやから。早よ去にやがれ！」

だが祖父は植木屋の声など、まるできこえなかったように、そのままつっ立って、植木をじっと見つめていた。



祖父と舜臣
『Who is 陳舜臣?』

俊仁はおそろしさのあまり、ぶるぶる顫えながら、祖父の袖をひっぱって、

「早よ行こ、お祖父ちゃん！」

と、半泣きの声を出した。

いつもは孫に甘い祖父が、そのときばかりは、きびしい声で、きっぱりと言った。

「ちゃんと植木を見てから、それから行くんだ」

植木屋は俊仁の祖父のそばまで寄り、「やい、ふざけとんのか！　おまえらに見られたら、植木が腐ってしまうやんかい。早よ去なんと、どつくぞ！」と拳をふりあげた。

俊仁の祖父は、やっと孫の手をとって、「さあ、帰ろう」と、ゆっくりと言った。

俊仁は祖父の手のひらが、燃えるように熱かったことが、いつまでも忘れられなかった。（これを一生忘れてはいけないぞ）

祖父の手のひらの熱は、俊仁にそう教えているかのようだった。（p.38-40）

陳舜臣さん屈辱の行事、三年に一度の指紋押捺

『失われた背景』（中公文庫版）から抜粋・引用します。

東方文明研究所オフィスの家主が殺され、同所員程紀銘に容疑がかかりそうになる場面です。

日本人の場合、前科があるとか、なにか警察で調書をとられたとか、そんな特殊なケースを除いて指紋をとられるようなことはない。

ところが、外国人は、外交関係者を除いて、一人のこらず指紋をとられている。外国人登録で、それが義務づけられているのだ。だから、もし程紀銘の指紋が現場から検出されたとすれば、すぐに外人登録の指紋と照合されるわけである。（p.130）

外国人登録は陳舜臣さんご自身にとっても、三年に一度やって来る、屈辱の行事だったのです。早川書房版『割れる』「あとがき」から引用します。傍線は加筆。

この秋はさわやかで、私のからだの調子もよかった。故障といえば、ただ指のさきがすこし荒れたぐらいである。

この作品の構想を練りはじめたころ、外人登録の切りかえがあった。われわれ外国人は、三年に一度、登録を更新しなければならない。そのときに、新しい写真と指紋をとられる。神戸の生田区役所では、指紋用インキを拭くために、ベンジンを浸した脱脂綿をくれた。私は皮膚が弱いので、ベンジンに負けて指さきが荒れたというわけだ。

■指紋押捺は、特別永住者については一九九三年から免除。

陳さんが〝外人登録〟の切りかえに訪れていた頃の生田区役所。現在は兵庫県神戸総合庁舎。

20 追谷（おいたに）墓地

『残糸の曲』に描かれた追谷墓地

追谷墓地は、ＪＲ元町駅の東口を出て、鯉川筋を北上、海外移住と文化の交流センターの裏手を登ったところです。

『残糸の曲 上』（朝日文芸文庫）から二ヶ所、抜粋・引用します。

神戸の追谷墓地参道では、並木の桜の枝に蕾がふくらみかけていた。

新しくできた再度山（ふたたびさん）ドライブ・ウェイをすこしあがり、入口に『閣道深』と刻まれたトンネルの手前で、右へ折れたところからその参道ははじまる。（p.249）

墓地、登り口

在留中国人のために、神戸には『中華義荘』という専用の墓地がある。修平の父も、とうぜんその中国人墓地に葬られるはずなのだ。

ところが、義母が猛烈に反対した。

彼女によれば、仇敵の家庭の墓のそば近くに埋葬されると、夫は死んだあとも争わねばならず、その魂がやすまらないという。

では、ふつうの日本の墓地にしようということになり、義母は石碑店に紹介された追谷墓地に墓を建てるつもりだった。北野町の家から車で行けば、五分もかからないのも魅力であったらしい。

修平はいま秀琴の案内で、そこを見に行こうとしているのだった。

追谷墓地には、ごくすくないが、中国人の墓もあった。有名な亡命画家胡鉄梅（こてつばい）の墓もそこにある。（p.253-254）

追谷墓地十六区にある胡鉄梅の墓　白い矢印

『走れ蝸牛』「家紋」にみる陳家の墓

『走れ蝸牛』（三玄社）「家紋」より抜粋・引用します。

私の祖父は昭和七年に世を去った。もう一族は神戸にいるのだから、神戸に墓をつくることになったが、石工は家紋を彫らねば、「恰好がつきません」と主張した。「中国には家紋などはありません」と言うと、「では、なにか適当に彫っておきましょう」と、かなりいい加減なものだ。

石工が我が家の墓のために、みつくろってくれた紋がマンジであった。これならお寺の紋ではあるし、普遍性があると考えたのであろう。じっさいに、「五つ割マンジ」とか、「ねじマンジ」といった家紋がある。私の父は、既成の日本の家紋を用いるのに抵抗があったらしい。「養子になるわけじゃなし」という気分上の問題なのだ。日本にまだない家紋にこだわった。父の意見をきいた石工は、「じゃ、マンジを逆にしましょう。これはないはずです」と、知恵をいれた。

こうして、祖父の墓に逆マンジが彫られた。アドルフ・ヒトラーがドイツで政権を掌握したのは、私の祖父の死の翌年のことである。私の父もくだんの石工も、逆マンジがナチスのシルシであることを知らなかったのだ。孫の七五三の衣裳で家紋が、五十数年ぶりに我が家の問題となった。まさか逆マンジは使えない。我が家の庭に桐があるので桐にした。ま、家紋などはそんなふうにしてできたのだ。

左の画像は陳家のお墓。祖父、恭和氏が「三十一世祖」という文字は墓碑の裏面に確認。特に気になっていた「潁川（えいせん）」の文字及びマンジがはっきりわかる。「エエッ！」、これは、お寺の記号のマンジで、逆マンジではない。この部分だけ石材が新しい。作り変えたよう。

『孔雀の道』に描かれた外国人墓地

『孔雀の道』は陳舜臣さんの初めての新聞小説で、神戸新聞に、昭和43年5月12日から12月31日まで連載されました。

連載予告に載った作者のことば

これは一人の若い混血の女性が、母親の人生遍歴のあとをたどる物語りです。彼女は母への共鳴と反発を織りまぜてひたすら自分の道を進みます。過去と現在の間にはむなしい空白ではなく、密度の濃い時間が詰まっていました。母孔雀の通った道に、はたして何が落ちていたか？

登場人物

●**ローズ・ギルモア**　主人公、27歳。父は英国人、二年前に死亡。母は日本人、終戦の翌年、ローズが5歳のとき焼死。イギリスの大学でアジアの近代史を専攻した学者。少女時代までを過ごした日本に、女子大の英語教師として13年ぶりに帰国。

●**中垣照道**　元、京都の、ある仏教系の高校の教師。30歳。実家は信州の田舎の仏寺。父は健在。仏教研究のため、一年あまりインドで暮らしての帰路。船上で、ローズ・ギルモアと知り合う。「ほんとうのママの姿を知りたい」という彼女に惹かれ頼られ行動をともにする。

●**ランポール夫人**　中垣が船上で知り合ったもう一人の女性。五十をすぎたと言うが若く見える。アメリカ人実業家を夫に持つ日本人。

●**立花康子**　ローズ・ギルモアの叔母(母の妹)。

『孔雀の道』の記述から

ローズ・ギルモア、立花康子、中垣照道の三人が、外国人墓地にあるローズの母の墓に参る場面を抜粋・引用します。

再度山ドライブ・ウエイの入口は、移住センターの西にある。

移住センターを右に見てしばらく行くと、急カーブがあり、そのさきにトンネルがある。

その短いトンネルを出ると、あっという間に山にはいってしまったかんじがする。

ドライブ・ウエイの入口から、修法ヶ原までは、約二十分の道のりである。左手に大竜寺の朱塗りの山門がみえると、ほどなく修法ヶ原に達する。

外国人墓地風景

赤松に囲まれて、水の澄んだ広い池がそこにある。その池を右にみて、数百メートル行くと、外人墓地の入口の鉄柵がみえる。

ひろびろとした墓地で、しかもローズは母の墓の所在を知らない。管理人に案内してもらうほかはなかった。

チャペルの前に、翼をつけた天使が、木の枝をかざしている像が立っていた。これは第一次大戦中に、神戸から出征して戦没した十九名の外人を記念するために立てられた碑である。…。

「ここです」

と言って、管理人が立ちどまった。

上部が弧をえがいている低い墓石があり、十字架の下に、

HISAKO GILMORE

と刻られてあった。

そのまえに花束が置かれている。

ローズは抱えてきた花束を、もとから置いてあった花束の横にならべた。二つともバラだった。（双葉文庫版p.376-380）

■このあと、結末に、外国人墓地の場面がもう一度出てきます。ここにランポール夫人が登場します。推理小説ですので、この場面にはふれません。是非ご一読を。

十九名の戦没者慰霊の碑